



第2回 持続発展教育(ESD)大賞 受賞校実践集

主催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
後援：日本ユネスコ国内委員会 / 株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development（ESD）は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育と言われています。

地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取り組みを積極的に実践する学校を奨励する「持続発展教育（ESD）大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国の持続発展教育の実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続発展教育の推進に寄与することを目指しております。2回目となる今年は、全国の小中高等学校より、昨年を上回る数のご応募をいただきました。（小学校13件、中学校9件、高等学校13件、中高一貫校2件の計37件）

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第2回持続発展教育（ESD）大賞として、6校を表彰し、ここにその実践をまとめさせていただきました。

本冊子が少しでも持続発展教育の実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

なお、第2回持続発展教育（ESD）大賞は、カシオ計算機株式会社様よりご協力をいただきました。

【講評】 島津 正数

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター事務局長

持続発展教育（ESD）大賞は、「各学校で正しいESDの概念に基づいた教育が積極的に実践され、持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与する」ことをねらいに、平成22年度から設けられました。

審査委員会におきましては、このねらいと、ESDの目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う」に基づき、審査を行いました。

これに加えて、

- ・学校全体として、組織的な取り組みとなっている
- ・教育課程へ位置づけられている
- ・他の学校の参考となる
- ・取り組みに独自の創意工夫が見られる

などの観点も重視されました。

持続発展教育大賞 … 奈良県奈良市立柳生中学校

教育課程全体にしっかり位置づけられている。校区内にある文化遺産や自然遺産に目を向け、歴史や自然を再発見・再評価させるユニークな取り組みを全校で推進している点が高く評価された。

ユネスコスクール最優秀賞 … 宮城県気仙沼市立階上中学校

気仙沼市は市教委がリードし、市全体で持続発展教育に取り組んでいる。その中で、階上中は平成17年度より地域と防災をテーマにESDを推進してきた。その実践は、今回の大震災時においても生徒たちの冷静な対応につながるなど大きな成果をあげた。この点が高く評価され、「ユネスコスクール最優秀賞」に選ばれた。

小学校賞 … 広島県福山市立駅家西小学校

「学校全体でESDで育てる子ども像を明確にもつ」「ESDカレンダーにより各学年の系統性を明確にする」などを教職員で共通認識した上で、「つながり」をキーワードにESDの視点に立って、地域ぐるみの多様な実践を展開している点が高く評価された。

中学校賞 … 東京学芸大学附属国際中等教育学校

生徒一人ひとりが学校や地域の様々な活動に参画し、「豊かさ」にアプローチすることでESDという概念の形成を目指している。この「豊かさ」をキーワードに各教科・領域との連携を明確にし、実践に深まりと広がりが見られる点が高く評価された。

高等学校賞 … 秋田県立秋田商業高等学校

「総合的な学習の時間」において、実践テーマの設定とその理解から、具体的な学習活動の展開までの確に進められている。その活動を通した生徒たちの成長が顕著であり、また、取り組みを本にまとめるなど大きな成果をあげている点が評価された。

審査委員特別賞 … 千葉県市川市立稲越小学校

枠組みの関係で賞から漏れてしまったが、審査の過程では他の受賞校に劣らない評価を受けた。審査委員より「賞からはすすのはもったいない」との声が相次ぎ、協議の結果、「審査委員特別賞」を授けることにした。実践は、小規模校の利点を生かし、「食」を通したESDへの試みを学校全体で取り組んでいる点が高く評価された。

受賞校におかれましては、これを機にますます持続発展教育の取り組みを充実されますことを期待いたします。また、来年の第3回持続発展教育（ESD）大賞にはより多くの学校が応募されますようお願いしております。

【審査会】



【表彰式】



持続発展教育（ESD）大賞

奈良県奈良市立柳生中学校

浦崎 信高

1. 見えざる手にみちびかれて

奈良市東部の山間に位置する本校校区には、春日大社の荘園に始まる古い歴史と、山里の営みの中で育まれた水と緑あふれる自然がある。東西6km南北8kmの広大な旧柳生村全域に相当する校区内の全世帯数は468、人口は1,278人に過ぎない（平成23年11月1日現在）。少子高齢化の進行は著しく、校区内の小中学校の児童・生徒は合わせて60名に満たない。この状況が今後も継続すると見込まれるなかで、自治連合会長を先頭にして、地域の活力の保持と展望の構築に多くの関係者が有形無形の努力を重ねている。

奈良市は「地域で決める学校予算事業」を平成22年6月に開始した。事務局である柳生中学校は同事業の地域分子算を活用し、摩利支天山に「学校を核とした祭り」と和みの場を再生し、柳生地区の次の50年を展望したシンボルとして甦らせる（サクラプロジェクト）」ことを構想した。



摩利支天山と校庭での大運動会仮装行列（約30年前）

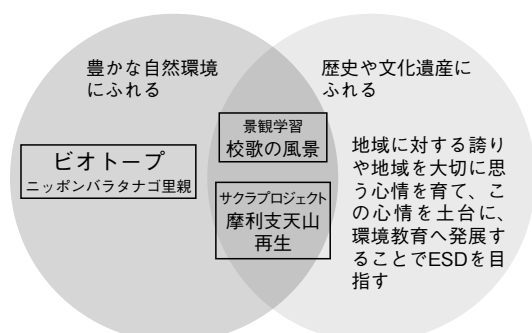
本校のESDの構想図を見ると、緻密な計算の元に展開しているように見える。しかし、これはあくまで取り組みを整理した結果で、一昨年までは、ユネスコスクールとは名ばかりであった。

平成22年7月に、学校支援地域本部事業の全体会で「地域で決める学校予算事業（地域分）」としてサクラプロジェクトを提案した時、誰もがこの事業の成功を危ぶんだ。



伐採前の摩利支天山（中学校の校地）平成22年8月

地域の協力者の力を借りて伐採が軌道に乗る頃から、職員間で本校生徒の課題を巡る議論が活発になってきた。全校18名の生徒の多くは家族的な雰囲気の中で生活し、物事にまじめに取り組むことができる。その反面、「保・小・中を通じての少人数の同一集団での成長は、人間関係の固定化による軋みをもたらししている。また、自尊感情の育成不全や自己表現力やコミュニケーション能力の乏しさがさまざまな面でマイナスの効果を与えている。」などである。



柳生中学校のESD構想

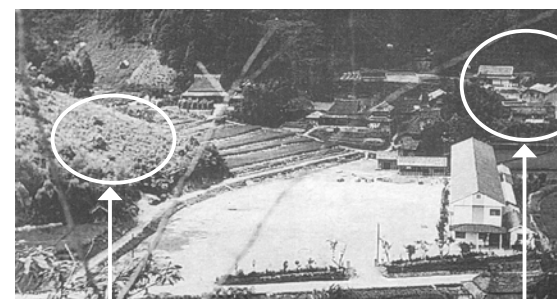
これらの課題に本源的考察を加えると、誇り守るべき地域の歴史や文化遺産、豊かな自然が子どもたちの心に残っていないという現実が浮かび上がる。そこで、地域の歴史や自然を再発見・再評価することで自信と誇りを呼び起こすことを考え、平成23年度研究主題を「ESDの視点を核にした教育活動の展開」とした。

本校が従来取組んできた小集団を活かした生徒会活動や福祉体験・職場体験などは、活動として外へ向うものの自己満足で完結する活動となっていた。これらを開かれたもの・外部へつながっていくものと転換するため、外への方向性を付与すべく「地域に学校の元気をradiate!（^{ふくしや}輻射）」を提唱した。

学校では構想図の三つの取組みに加え、外部講師による体験活動、奈良ASPネットワークの活動への積極参加、ESDの校内研修などに全校体制で臨み、研究主題の具現化を模索している。まさに「気がつけばESD」へと、invisible hand（見えざる手）に導かれた想いがする。

2. サクラプロジェクト 摩利支天山再生

校地の摩利支天山は、頂上から北へ笠置山に向かって一望しうる景勝の地であり、柳生藩陣屋と家老屋敷の中間に位置する要害である。その名前は、江戸時代の初めに柳生宗在が頂上に武道の神である摩利支天の祠を造営したことに由来する。このため、摩利支天山は特別な場所として地域住民による手入れが行われる桜山であった。時代の推移の中で雑木山と化した摩利支天山の再生は、平成22年8月より生徒の手で始まった。



左上が摩利支天山 中央は中学校旧校舎 右上には家老分家

地域の年配者の共感を呼び起こしたこの取り組みも、当初は作業に加わらなかった女子生徒には不評であった。雑木山しか知らない彼らには、自然破壊としか受け止められなかったのだ。

生徒たちが自分たちのものとして摩利支天山に親しむ取組み、摩利支天山から感動する仕掛けを考えていくことが、次のステップとして求められた。

生徒が積極的に取り組むか、全職員の協力が得られるかという不安の中、平成23年3月、生徒・



生徒による摩利支天山頂上の伐採作業 平成22年8月



生徒・職員・地域住民による摩利支天山への山桜植樹

職員・地域住民による46本の桜の苗木植樹を行った。植樹をきっかけに、生徒たちは自分たちの山として眺め、登る機会も増えた。職員の話題に数多く摩利支天山が登場し、何人もの地域の方から感謝の言葉が寄せられた。また、頂上に観光客の姿が増えるにつれ、生徒たちの言葉の端々に植樹活動への自信が感じられるようになった。



朽ちた株からの桜の芽生え 斜面に笹百合の姿がみられた

さらには地域の保育園に呼びかけ、園児たちが摩利支天山の豊かな自然に親しむようにもした。



山頂で木の実をひろって遊ぶ柳生保育園児 平成23年10月

摩利支天山の整備と活用は柳生地区の次の50年を展望した長期にわたる事業であり、「地域で決める学校予算（地域分）」に加えて、東京三菱UFJ銀行よりユネスコスクールESDアシストプロジェクトの助成を受けている。

3. ニッポンバラタナゴ里親プロジェクト

校長主導の形でサクラプロジェクトが進行する中で、理科担当から放棄されていた学校の実習用水田の活用提案が行われた。自然に親しむ場として湿性ビオトープを作りたいというものである。あわせて近畿大学農学部の中川研究室が進めている「ニッポンバラタナゴ里親プロジェクト」（奈良公園の世界遺産エリアに生存していたニッポンバラタナゴを学校で守り育てる活動）に参加することにした。幸いにも、平成22年12月に、毎日新聞・国際花と緑の博覧会記念協会の助成を得てビオトープを造成することができ、大学との連携も始まった。



完成直後のビオトープ 周囲の板は廃材 平成22年12月



ニッポンバラタナゴ・ドブガイ放流 平成23年3月

この連携によって、プロジェクトの意義や絶滅危惧種の保護等について大学の先生の講義を受けたほか、観察等で大学生とともに活動することは、生徒にとって貴重な学びの機会となっている。

7月に生徒たちは池をとりまく足場用のスノコ板製作に取り組んだ。



学校横の打滝川で、ヨシノボリ探索 平成23年4月



北川先生より、前回の活動のふりかえり 平成23年6月



地域の製材店で購入した杉材でスノコ板作り 平成23年7月



池干し・生物個体数調べ・土嚢作り 平成23年11月

11月の池干し作業では、泥上げや池の中の生物回収に熱心に取り組む生徒たちの姿が見られた。ニッポンバラタナゴの生存やドブガイの繁殖が確認されて喜ぶ生徒たちの姿には、自然に関わる姿勢が乏しかった昨年からの大きな変容が感じられた。この活動は、いろんな局面で生徒たちの自発的なエネルギーを引き出すことができる。（平成23年12月25日世界遺産サミットin奈良にて分科会発表）

4. 景観まちづくり学習 校歌の風景

本校の校名は平安時代の文献に登場する荘園名に由来し、正長元年の土一揆に関わる徳政碑文が学校のすぐそばに残っている。かの柳生一族はこの地に居を構え、「柳生新陰流」の剣道を伝えた。しかしながら、由緒ある地域の歴史や、日本の原風景とも言うべき中山間地域の里山が織り成す豊かな自然に誇りを持ってぬま、子供たちは成長し、やがて流出していく。また、柳生中学校区の伝統として、小学校より全員で行ってきている木刀を用いた木剣体操も心の支えとして機能していない現実があった。ここに私は、学校の取り組みに何か肝心なものが欠けているという気がしてならなかった。

また、平成22年度より始めた「サクラプロジェクト」の取組みと、ビオトープに関連する活動の関係も整理されていないままであり、繋がりに乏しく教育的な相乗効果を期待し得ないまま進むことが危惧された。そこで、これまでの取組みの方向性を生徒会活動や授業そのものへ深化し、生徒の情操を涵養することで地域を誇り地域を愛する子供たちを育成したいと考え、都市文化振興財団の助成をうけて景観学習「校歌の風景」に取り組んだ。



正長土一揆（1428）碑文
神戸四箇郷の徳政（借金帳消し）を宣言したこの碑文は日本史の第一級資料として名高い学校の近くの抱瘡地蔵の横に彫られている

奈良市は市の教育目標に、「世界遺産に学び、郷土に誇りをもつ教育の推進と次代への継承」を掲げている。当初に構想したのは、校歌の語句の意味学習を国語科、歌唱を音楽科、歴史的な内容を社会科と体育科（木剣体操）、自然的な内容を理科で学び自らの目と心でこれを咀嚼すること。自ら調べる力・調べたことをまとめて発表する力をつけるという本校生徒の課題克服に向けて、英語科の取組みも絡めていくというものである。



摩利支天山の頂上での木剣体操 平成23年7月

「校歌の風景」は模索ばかりの実践であり、現時点では、生徒会と社会科・体育科・理科が中核となって取り組んでいる。社会科では、平成22年度には残したい地域の宝物について生徒たちに自分の足で校区を探索する「柳生の世界遺産を探そう」



「柳生の世界遺産を探そう」発表会 平成22年11月

を行ってきた。今年は「校歌の風景を見つめよう」に取組み、来年度は「柳生の歴史を後世に伝えよう（仮題）」というテーマで、最近では地元でも埋没しつつある地域遺産の掘り起こしを行い、生徒による地域活性化につながる発信に結びつくことを構想している。

理科では第二分野指導のあらゆる機会を通じて、校区の自然に注目するように指導しており、生徒会も取組みへの呼びかけを粘り強く行っている。

校歌の風景を見つめてみよう ～地域のよい景観を発見しよう～

柳生中学校校歌

一、世に高く秀でし星の
ほまれある土の露りよ
曇りなき剣をしのび
正義の光尽きざる真理
ただ一すじにもとめわれら
あふ放煙の柳生中学

二、山なみは雲かにめぐり
星川の水澄むところ
開けゆく社会のために
結び合いつつだゆまめ努力
ただ一すじに尽きわれら
あふ情しき柳生中学

三、高原の空は捨てなく
限りなき夢よほるか
野路を行く道連れれど
希望みなぎり高なる血潮
ただ一すじに動きわれら
あふ栄えあれ柳生中学



(学習のねらい)

・校歌を通して地域に関心を持ち、地域を知る活動を楽しむ。

(学習活動)

・校歌の中から好きなフレーズを見つけ、その情景の場所に行き、スケッチ・写真撮影などで記録する。

(活動計画)

・新旧生徒会執行部を中心に全員で取り組みます。

前半 11月14日(月)～21日(月)

後半 12月1日(木)～12日(月)

休日(11/19、20、12/3、4、10、11)を利用して活動してください。

ただし、11月21日(月)～30日(水)は活動しません。テストにむけて学習に集中してください。>

※最終提出日 12月12日(月)までに提出してください。

※デジタルカメラの必要人は、学校のものを貸し出します。生徒会執行部に申し出てください。

生徒会の呼びかけ 平成23年11月

5. 地域へ元気をradiate!

「学校のすべての活動を通じて地域にエネルギーを与え、共振を呼び起こしていくような取組みを、前例にとらわれずに創意工夫をこらして展開していく」。これは平成23年の本校のスローガンの説明である。

本校では、生徒会が東北大震災や奈良県南部の洪水被害に対し募金や学用品支援を行うことや奈良ASPネットワークのワークショップに参加すること、打滝川の魚に関する小学生の質問に答えること、「地域で決める学校予算（中学校分）」による星空観察や和太鼓鑑賞を保育園・小学校・地

域住民に呼びかけることなどを、すべてradiateとしてとらえている。

ワークショップ参加報告 平成23年9月

同時に、学校の元気あふれる諸活動をWebページを通じて発信すること、「校長室便り 緑の風」として地域教育協議会構成員はもとより小学校の全保護者・学校評議員にも配布すること、地域の診療所や理髪店にもおかせてもらうことも間接的ながら「地域へ元気をradiate!」だと考えている。

職員・生徒・地域の意識が変わることを目指して始めたが、多くの方から情報や支援をいただくことができ、幸運にもここまでこれた。しかしながら、サクラプロジェクトもジオトープもこれから正念場であり、心をひきしめて今後も努めたい。生徒数の減少は更に続くが、自分自身に誇りをもつと同時に、生活の場である学校や地域への愛情をもって行動する生徒の育成をめざしたい。

美しい星空も柳生の誇り 平成23年7月

ユネスコスクール最優秀賞

宮城県気仙沼市立階上中学校

戸羽 康幸

1. はじめに

本校では平成17年度より、総合的な学習の時間を使って防災教育に取り組んできた。災害発生時や発生後に、自分の身を守るために自分たちでできることや、地域の一員として地域の方と協力してできることは何かを考え、防災意識を家庭から地域へと波及するとともに、災害発生時に対応できる力を養うなど、地域の防災リーダーを育成することをねらいとしている。地域全体の防災意識を高めることは、まさに持続発展可能な社会を作るためには必要不可欠なことであり、近年ではESDの視点を意識して教育活動にあたっている。

2. これまでの取り組みと成果

本校の防災教育の特徴は、1年ごとに「自助」「公助」「共助」のテーマで学習することで、中学校3年間で1つのサイクルの活動を行っていることである。そして、毎年総合防災訓練を行い、学校に設置されている緊急地震速報システムを活用して避難訓練や、その年のテーマにもとづいた訓練を行っている。また、1年間の活動の中では、学年毎に津波体験館の見学や応急手当講習、AEDの使い方、非常食調理といった体験活動を行っている。さらに、気仙沼消防署や市危機管理課、消防団や婦人防火クラブといった地元の関係機関が集まって防災推進会議を行い、総合防災訓練の進め方などを打ち合わせして行った。

自助・公助・共助の3年サイクル

・「自助」

自分の身を守ること、災害発生時の被害を最小限にすることを目的として取り組んでいる。過去の津波体験者から講話をいただいたり、液状化現象の仕組みや建物の揺れ方の学習、地域への聞き取り調査を行った。また、地区の防災マップを作成し、予想浸水区域や安全な避難経路や避難場所を確認し、総合防災訓練では作成したマップを基に地区の実地踏査を行った。

防災マップ作成風景

・「公助」

災害発生時における、公的機関の活動について知ることを目的として取り組んでいる。気仙沼消防署や市危機管理課の協力を得ながら、災害救助の体験談を聞いたり、救急車やはしご車、特殊工作車の見学を行った。また、被災したときに大切なことは何か、中学生にできることは何かを考え、次の5つの活動班に分かれ、体験活動を行った。

救出班……場面を想定しての救出訓練

救護班……三角巾を活用した応急手当訓練

炊き出し班……非常食を活用し、手軽に調理で

きる献立の炊き出し訓練

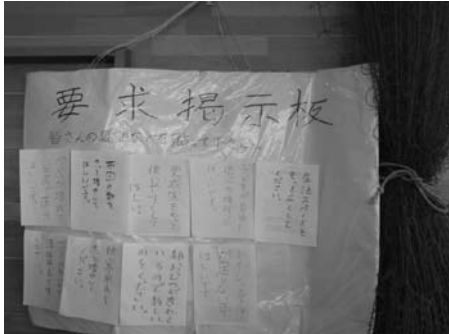
テントトイレ班……工夫したテントやトイレの設営訓練

避難所班……プライベート空間を意識した避

難所の設営訓練



ダンボールで仕切った避難所設営訓練の様子



訓練で作成した掲示板



訓練で炊き出しを配給している様子

・「共助」

消防団や婦人防火クラブといった地元の関係機関や、階上公民館を中心とした地域住民と共に、災害発生時の活動を実践することを目的として取り組んでいる。5つの班の活動に加えて、放水訓練やバケツリレー、避難所の設営の仕方や炊き出し訓練などを行い、生徒が調べた内容を伝えたり、地域の方からは先人の知恵を教えていただきながら、合同で訓練に取り組んだ。



地域の方とのバケツリレー訓練

平成22年度までの6年間、2サイクルの活動を行うことにより、生徒には以下の変容が見られた。

- ・防災についての意識が高まり、家族で防災に関する話題が増えた。
- ・自然災害についての正しい知識や、災害発生時に身を守るための様々な技能を学んだ。
- ・地区毎の住民対象の防災訓練に進んで参加し、防災学習で学んだ知識を住民の人たちに伝えるなど、地域の一員として、互いに助け合う気持ちが強くなった。

3. 震災を通して見えたこと

・中学生の動き

地震発生時、揺れ始めて間もなく緊急地震速報が鳴り響いた。当時1、2年生だった生徒は翌日に控えた卒業式に備え、体育館で準備と練習をしている最中であった。生徒は皆、各自の椅子で頭部を守るといった行動をとり、指示にしたがって屋外へ避難した。また、早く帰宅していた3年生も、多くの生徒が中学校や地域の避難所まで避難してきた。その後、避難してきた地域住民とともに、津波に備えて整然と校舎内へ避難するなどの、これまでの訓練の成果を発揮することができた。

本校の校舎および体育館が避難所になったが、中学生はテントやブルーシートを運んで駐車場に組み立てたり、各教室に柔道の授業で使っていた畳を運ぶなど、避難所設営の初期作業を行った。

震災初日の夜は、備蓄していた物資が少ないうえに、雪がちらつく天候であったため、いかに暖をとるかが課題であった。その中でも、卒業式のために準備していた紅白幕や机に被せる白布を重ねるなどの工夫をする姿が見られた。

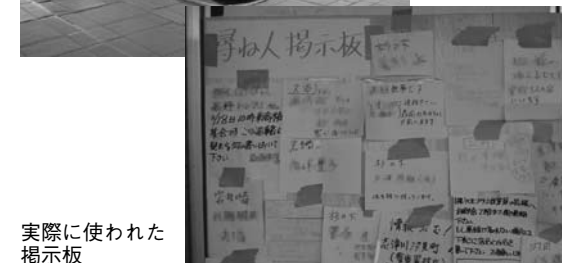
避難所の運営が気仙沼市職員を中心とする体制が出来上がった後も、体育館のフロアや校舎廊下にダンボールを敷き詰める作業、毎日の掃除、トイレ用の水汲み、食糧の配給など、それぞれにできる作業を率先して取り組んだ。特に運ばれてきた物資の運搬では、訓練で行ったバケツリレーの形式で、協力し効率的に取り組むことができた。また、避難所の情報や要望を記載する掲示板は、訓練と同様のものが使われた。これらは「テント

トイレ班」「避難所班」「炊き出し班」等の活動実践そのものであり、これまでの訓練が生かされている。

「救出班」「救護班」の訓練を行った生徒についても、その場で自分にできることは何かを考え、何らかの行動に移し、互いに助け合う取り組みにつながっている。また、身につけた技能は、どれも今後の生活の中で必ず生かせるものである。



避難所となった体育館



実際に使われた掲示板



配給を手伝う中学生

・卒業生のはたらき

震災発生直後、中学生の指揮をとったのが、3年間防災教育を受け階上中学校を卒業した高校生や帰省していた大学生であった。また、避難所運営の組織ができあがった後もボランティア全体の動きの統率を任される者もあり、避難所の運営を積極的にサポートする者も多くいた。

また、他の避難所においても、本校の卒業生が率先してダンボールやカーテンを集め、避難所開設のサポートをしていたという話を聞いている。本校でこれまで防災を学習してきた者が、意識を

高くもち、防災リーダーとして実践するよい例となった。



避難所で働く高校生

・地域との関わり

これまでの合同訓練などを通し、中学生から家庭、家庭から地域へというように、地域全体の防災意識も点から線、線から面へと広がっていた。その成果が避難所での生活にも表れ、教職員と市職員のみでなく、地域の自治会長の方などみんなで協力する意識が高く、毎朝打ち合わせを設け、避難所運営の役割分担を行うことができた。避難者どうしで掃除や食事の配給の当番ができたり、早朝に健康維持の体操を一齐に行ったり、小さな子どものための保育室ができるなど、組織や規律が整った避難所生活を送ることができた。これにより、地域のつながり、絆が強く見られた。



教職員・市職員・地域の方での打合せ



早朝の体操

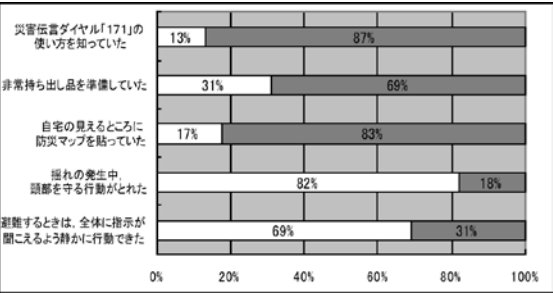
4. これまでの活動の反省と今年度の取り組み

今年6月、震災の記録を残すことや、今後の防災教育の方向性を模索するため、全校生徒および過去3年間の卒業生数十名、中学校避難所にいた

地域の方々を対象にしてアンケート調査を行った。

その結果、「頭部を守ることができた（82%）」「避難中は全体の指示を聞くために静かにできた（69%）」などの有事の際に気をつける行動は落ち着いて実践できたが、「災害伝言ダイヤル171の使い方を知っていた（13%）」「非常持ち出し袋を準備していた（31%）」「自宅の見えるところに防災マップを貼っていた（17%）」など震災前の準備や心構えの点で、まだ不足しているところが見られる結果となった。

こうした課題を踏まえて、今年度の学習テーマを「自助」とし、震災発生時、自分の身を守るのは自分自身であり、日ごろの準備の大切さを伝える実践を行った。



・地震避難訓練

学校が再開後もしばらくの間、本校校舎の特別教室および体育館は、避難者の居住地となっていた。このような状況の中で震災があった場合にも、敏速・沈着・協力的な態度で行動することの必要性を理解するため、中学生と避難者の合同避難訓練を実施した。授業中である昼間は、勤めのないお年寄りの方の割合が多いため、教室の近い3年生が避難者を誘導しながらの訓練となった。

また、総合防災訓練では、授業の合間の休憩時間に地震が発生したと想定し、避難訓練を行った。生徒には予告せずに実施したが、緊急地震速報の試験放送を聞く



休憩時間の避難訓練

早く机の下に身を隠したり、廊下にいた生徒は大きな柱の下に身を寄せるなど、落ち着いて避難行動に移る姿が多く見られた。

・災害伝言ダイヤル「171」の使い方

災害時に自分の安否を知らせたり、家族との集合場所を確認するための有効な手段であると考え、使い方の講習会を行った。その後、生徒が各自宅で実際に録音することとし、使い方を体験した。

始めは不安がっていた生徒も、いざ使ってみると音声ガイダンスに沿って操作すればよいことに気づいた。実際に体験することで技能の向上につながった。また、どの様な伝言を録音するのか家族で確認する機会とし、災害時に家族とどこで待ち合わせをするのか話し合うことができた。

・非常用持ち出し袋を考えよう

避難時に役立つ道具や避難所で数日間生活するときに必要な物を考える機会とし、意識の高揚を図った。また、保管場所や総重量の上限、カバンの大きさを考えさせ、実際に中学生が持ち出せることを想定し取り組んだ。

災害伝言ダイヤルと併せて、自宅で家族と一緒に考えることで、災害時の行動を確認する場となり、より防災意識を高めることができた。

・防災マップを作ろう

今回の震災を受け、地形の変動や地区の状況を把握することが大切であると考え、防災マップ作りを行った。浸水区域と一致する海拔15mの等高線をマジックでマークした。また、今回の震災は干潮時であったこと、防潮堤などがなくなったことから、同じ規模の津波が発生した場合、広範囲の浸水が考えられる。より高い場所である海拔20mの等高線も調べ、地域の高い場所、低い場所を確認した。さらに、地形図には表示されていない細い道を地図上に記載し、避難場所までの最短経路や安全な経路が分かるようにするなど工夫した。また、総合防災訓練では、小学生を交えたフィールドワークを実施し、中学生が作った防災マップを使い、説明をしながら避難経路や危険箇所の確認を行った。



小学生を交えた
フィールドワーク

また、学区内だけでなく、ショッピングセンターなどがある気仙沼の中心街の防災マップを担当したグループもあり、休日や夕方に買い物をしているときのことを想定して作成することができた。

生徒達は実際に震災を経験しており、頭の中ではすでに分かっていることや気づいていることも多いが、改めてマップに表現することで、より具体的に被害の様子や浸水区域を確認することができた。

調べたことは、12月の授業参観において、保護者の前で発表することにより、自分が住んでいる地域以外の内容の確認と、保護者への周知を図った。その際、中学生から保護者へ対して、「災害の時、自分たちは防災学習で学んだことを生かし、それぞれで避難するので、保護者の方も危険箇所には戻らずにそれぞれ避難して身の安全を確保してください」というメッセージを伝えた。



発表会の様子 作成した防災マップ

・「こころの時間」の設定

生徒一人一人が震災によって負ったこころの負の部分をやわらげるために「こころのケア」を図るとともに、これからの社会を担う生徒が、震災体験を「こころの財産」として、自分の将来の役割や自分ができることを主体的に考え、よりよい生き方を目指し、夢や志をもって、その実現に向かって意欲的に取り組んでいけるよう「こころの復興」を図るため、「こころの時間」を設けた。この時間では、構成的エンカウンターに取り組ん

だり、「10年後の気仙沼」を思い浮かべて作文を書くなどしてきた。また、自衛隊と吹奏楽部の合同セッションや、神戸のアトリエの方々に「笑顔」や「希望の鯉」の描き方を教わるなどの交流も行った。



希望の鯉



自衛隊とのセッション

5. 今後の課題

一定の成果が見られた一方で、様々な課題も散見している。

震災はどこでいつ発生するかわからない。階上地区、気仙沼地区でない場所で遭遇するかもしれない。また、真夜中かもしれないし、30年後や60年後に発生するかもしれない。場所も時代も超越し、正しい知識をもとに、その場の周囲の人と協力しながらベストの判断をして自分の命を守り、周囲へ発信していける防災リーダーを育てていくことを、これからも心がけていかなければならない。

そのためには、今年度は実施できなかった防災推進会議を行い、様々な意見を取り入れ、広い視野で学習の計画を立てていかなければならない。また、本校校庭の仮設住宅入居者との連携、合同訓練も模索していく必要がある。

そして、地域で多くの犠牲者が出た現実から、「ここは安全という思い込み」「みんなであれば安全という思い込み」「自分が助けなければならないという思い込み」をなくし、正しい判断ができる力の育成を目指す上で、自助・共助・公助の視点から、持続性のある防災教育のカリキュラムの再編成を行っていきたい。

小学校賞

広島県福山市立駅家西小学校

村上 克行

研究主題

『自律と共生をめざし、豊かな感性を培う子どもの育成』 ～ESDで育む人間性～

1. はじめに

本校は広島県南東部に位置し、学区東西は近郊型大型店舗地域、北は国指定史跡「二子塚古墳」、南は広島県一級河川「芦田川」と、自然と文化に恵まれ、地域の温かい理解と様々な支援が得られる中、今年度は創立28周年を迎える。平成20年度より文部科学省「新しい環境教育調査研究」「人権教育研究」等の指定校として、児童に豊かな感性を培いながら、「生きる力・学ぶ意欲」の醸成に取り組んでいる。とりわけESDの視点で教育課程を見直し、新学習指導要領で育む力を重視した駅西型ESD関連カレンダーを作成し、有効活用してきた。平成23年1月にはユネスコスクールの加盟校となり、＜希望ある未来、駅家・福山の担い手となる「生きる力」の育成＞をめざし、「ESDで育む人間性“自主”“自律”」を教師の合い言葉としてESDの深化と拡充に取り組んでいる。

2. 主題設定の理由

わが国における「ESDの10年」の中では、ESDを「一人一人が、世界の人々や将来世代、また、環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革する」ための力を育む教育と位置づけている。

このESDの考え方は、平成20年3月告示の「学習指導要領」においても、各教科等の目標や内容に取り入れられている。本校では、「総合的な学習の時間」や地域活動等を通して、環境教育、体験活動をはじめとして取り組んできている。これまでの取り組みをESDの視点から捉えなおし、学習

内容を系統的・横断的につなぐことで、子ども一人一人が持続可能な社会づくりに参画する力を育むことや、様々な問題に対して主体的に関わり解決する力を育むことができると考えた。

私たち学校における指導者は、このことを深く理解し「地球に生きるすべてのものが幸せに暮らせる未来づくりのためにESDに取り組まねばならない」という使命感をもち、この研究を進めている。

3. 駅家西型ESDの捉え

- ・ ESDは、持続可能な社会づくりのための担い手（主体）づくりである。

・ ESDは、人格の発達や「自律心」「思考力・判断力・表現力」「責任意識」などの人間性を育むことである。

・ ESDは、他人・社会・自然環境との関係性を認識し「関わり」「つながり」を通して、立場や考え方の違う人々を理解するとともに、尊重しながら共働的に課題を解決する力を身につけることである。

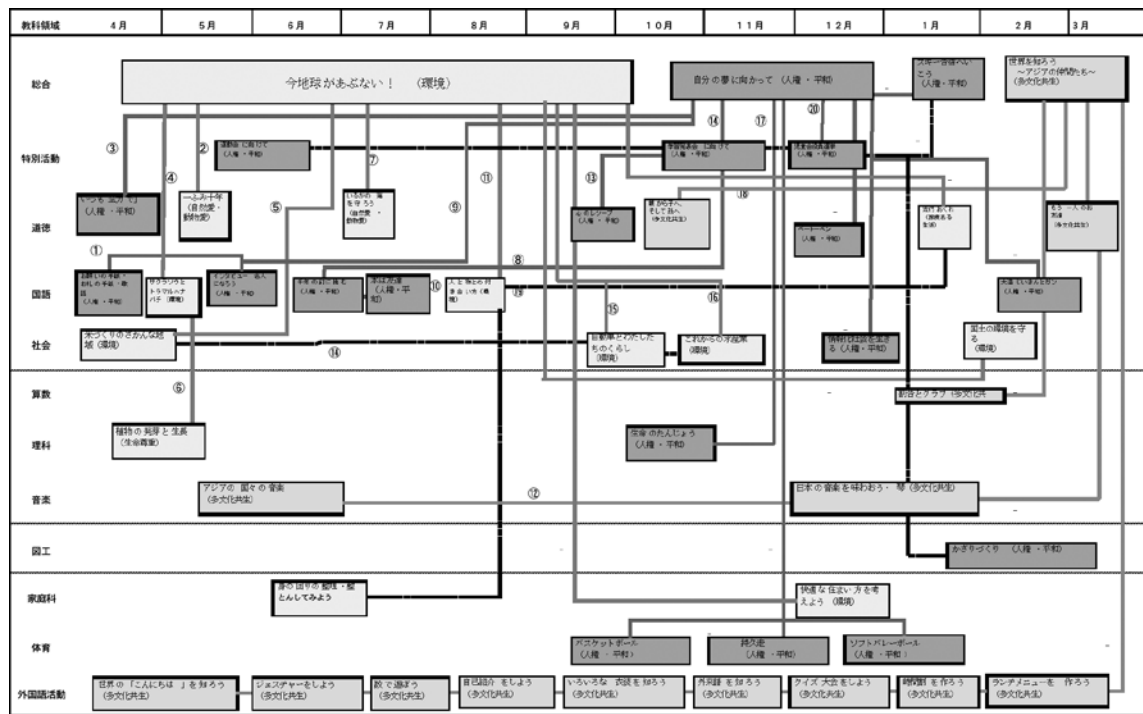
- ・ ESDは、環境の保全と経済の発展の両立を探究するなど、多面的・総合的に考えることができるようにすることである。

この捉え方のもと、教育課程の見直しをし、これまで各教科等領域の中で取り組まれていた内容をESDの視点でつなぎ、つないだものを指導者が目に見え共有できるものをつくる必要があると考えた。

それが本校のESD関連カレンダーである。

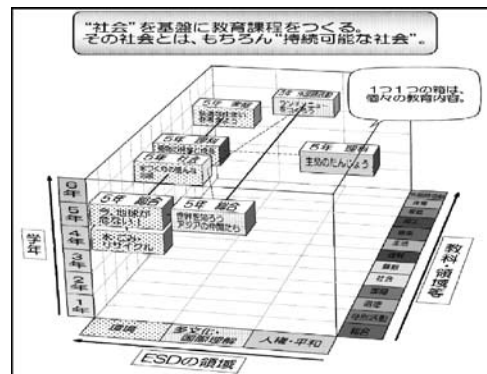
4. ESD関連カレンダーの作成と特徴

(資料① 5年 ESD 関連カレンダー)



環境教育、多文化・国際理解教育、人権・平和教育の３領域にESDの視点を取り入れ、教育活動全体を全学年で見直し、教育課程全体の系統性の整理と体系化を図ることとした。

(資料② 教育課程の3次元モデル)



従来は、学年と教科等の2つの座標によって教育課程の内容を捉えていた。新たに、ESDの領域という座標を設けることによって、教育課程の内容を3次元において捉えていくことに意味があると考えた。多数のマス全体が、小学校教育のすべての内容である。3次元モデル（資料②）にあてはめれば、現在の活動が何とつながっているのか、学年を超えて見えてくる。

(資料③ 5年 つながりの理由)

①	国語科において、インタビューや手紙の書き方についての基本的な技能を身に付けることができるから。
②	動植物や自然を愛するということ、さらに自然を保護することの根本は、動植物や自然の美しさ、雄大さに触れ、感動することを持つことである。わずかマッチ棒の太さしかないチングルマにも10年の成長があり、その生命力の尊さを感じ取らせたいから。
③	自分の夢を実現するためには、絶えず自分自身と向き合いながら、様々な不安や誘惑に打ち勝ち、自分ができることに全力を尽くしていく必要がある。イチロー選手の記録に挑む姿から、希望や勇気を決して失わずにいつも全力で物事に取り組んでいこうとする、強い気持ちを感じ取らせる。自分もそうありたいと願い、夢や理想に向かって着実に前進していこうとする気持ちを育てることができるから。
④	自然界や生態系で起きている変化を説明文で読み取る。長い年月をかけて、お互いの利益に得る共生関係を築いていること、また、それが生態系全体でつながり合っていることを理解させる。人間も生態系の一員であり、自分たちの生活と、自然界はつながっていることを知る。環境問題も、人間自身、つまり自分たちの問題であると考えることができるようにするから。

この3次元モデルを学年ごとに時間の流れで書き表したものが「ESD関連カレンダー」である。本校のESD関連カレンダー（資料①）は、つながりを示す線に番号をつけている。その番号に対応して「つながりの理由」（資料③）を明文化している。ESDの基本的考えに立つならば、この領域を超えるつながりとその理由が重要であると考えた。ESD実践を、学級・学年・教科・領域を超えて学校全体の教育活動の中で、いつ、だれが授業者となっても展開することができるからである。つまり持続可能な教育である。これが本校のESD関連カレンダーの特徴である。子どもの学びが内面でも一つにつながることは、子どもたちの学ぶ意味を深め、価値観や自分の生き方を見つめられる場ができることになる。

5. 授業実践例

【5年生「今、地球があぶない！」】

地球温暖化は本当にCO₂が増えたから？

授業実践 5年生「今、地球があぶない！」

空気中のCO₂が増えると気温は高くなる？
CO₂が多い空気の方が温度が下がりにくいんだ！

CO₂を多く排出しているものに車があるよ

アンケート調査をしよう！
地球温暖化を感じることがありますか？

なんとかしたい！

将来、どんな地球に住んでいたい？

・バックキャスト（未来から今を考える）

地球温暖化の現状を自分たちの身近な問題と捉え、自分ができる取り組みを考える。

問題把握、課題設定

未来から今を考える！

理想のイメージを持たせ、バックキャストすると、具体的な方法が見えてくる

理想の地球を思い描いてみよう。
どんな地球に住んでいたいですか？

理想の地球と現実の地球は大きなギャップがあるなあ
どうすればいいんだろう・・・

自分のできること、学校のみんでやること、家の人に協力してもらうことに分類する。

自力解決

自分のできること、学校のみんに働きかけること、家の人に協力してもらうことに付箋を分けてみよう！

エコファミリーでしたことはどう生かしたらいいかな。
学校生活を振り返ってみよう。家でできることは学校でもできるかな。

他の学年の人にも呼び掛けたらどうかな。たくさんの人が実行すると、たくさんCO₂を減らすことができると思うよ

集団解決

給食の食べ残しをなくしたり、教室を出るときには電気を消したりすることは、どの学級でもできることです。

家族の人に協力してもらうと、家ができることが増えます。

もっと多くの人に協力してもらうには？

・ちょっと頑張ればできること、できないことに分けてみよう。

・地域や広い地域まで知らせると効果のあることに分けてみよう。

自分たちのアイデアをまとめ発表

<平成21年度>

全国オムニバスサミットin福山

<平成22年度>

ふくやまバスまつり

【6年生「ふるさと駅家町 古墳フェスタ」】

6年生は、「ふるさと駅家町古墳フェスタ」に向け、地域にある国指定史跡「二子塚古墳」について調べ、福山の人たちに埋蔵文化財の存在意義を発信するという活動を進めた。



○学区町づくり推進委員会の方々と古墳清掃

ふるさと 駅家町 二子塚古墳

二子塚古墳の大きさ

出土遺物

二子塚古墳の築造方法

二子塚古墳の内部構造

二子塚古墳の周辺環境

二子塚古墳の歴史

二子塚古墳の現状

二子塚古墳の未来

二子塚古墳の大きさ

出土遺物

二子塚古墳の築造方法

二子塚古墳の内部構造

二子塚古墳の周辺環境

二子塚古墳の歴史

二子塚古墳の現状

二子塚古墳の未来

○国語科単元「ガイドブックをつくろう」の学習とつなぎ、二子塚古墳リーフレットを作成



○リーフレットを使つての古墳ガイドボランティア

6. 付けたい力の明文化とその評価

本校では、国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」の中間報告書にある<ESDで重視する能力・態度> 8項目をもとに、「自律心」「思考力・判断力・表現力」、「責任意識」の3項目に集約して付けたい力を設定した。（資料④）

環境教育		知識	能力	態度	技能	思考力	判断力	表現力	責任意識
学年	中心テーマ・重点	関連テーマ	自律心	思考力・判断力・表現力	責任意識	自律心	思考力・判断力・表現力	責任意識	責任意識
1	1. 自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み
2	2. 自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み
3	3. 自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み
4	4. 自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み
5	5. 自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み
6	6. 自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み	自然の恵みと自然の恵み

評価方法…見取り表への記入方法

評価規準の見取り計画表(学習前)			
6年	単元名(活動名)	【 宮野文化体験 】多文化・国際理解教育	
教科・領域名	ESDで付けたい力	力の付いた児童の姿(見直し)	評価基準

評価規準の見取り計画表(学習後)		6年 単元名(活動名)	学習内容(活動)	多文化・国際理解教育
教科・領域名	ESDで身に付いた力	ESD関連カレンダーをつないだ児童	児童の表現の例	評価基準

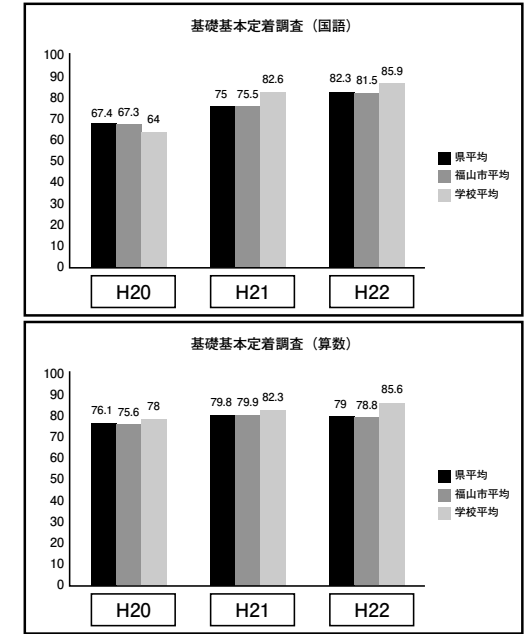
・学習前のつけたい力がついたかどうかを書く。
付かなかったなら、なぜ付かなかったのか、どこまでついたのかを分析して書く。

・学習前と比較してつないでみてどうだったかを簡潔に書く。

・児童の変容が分かるものを入れる。
(ノート、ワークシート、作品、写真等)

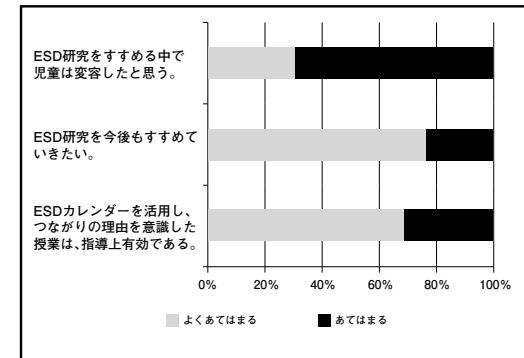
7. 成果と課題

(1) 児童の意識の変容



広島県「基礎・基本」定着状況調査結果より、ESDの研究初年度と通過率の数値比較をすると、3年目は、国語科は21.9ポイント、算数科は7.6ポイント上がった。これは、指導者がESD関連カレンダーを活用して、児童につけたい力を常に意識して授業や指導を行うことで、授業力も向上し、児童にも学力がついてきたからであると考えられる。特に、テーマとなる学習との出会いの場面の工夫により、児童自身が疑問をもち課題を見つけ、追究していこうとする関心・意欲が、他の教科においても継続するようになったためと考える。

(2) 指導者の意識の変容



アンケート項目

- ①ESDの研究を進める中で児童は変容したと思う。
- ②ESD関連カレンダー作成は、児童に指導する上

で有効である。

③ESD研修は魅力があった。

④ESD（持続発展教育）の学習指導案を作成、指導することにより自分の授業力は少しでもアップしたと思う。

本校職員対象のアンケートの中に《「10年後、20年後の地球のための教育」を行っているということから、教育に対する使命感と誇りを持って子どもたちに接することができるようになった。》《単元や教材をどうつなげながら指導すればよいか意識すると同時に、つけたい力から期待する子どもの姿を事前に設定し、評価基準を定め評価をしていったので、児童の変容を見取ることが容易となった。》という感想があった。

本校は、教職員25名のうち20代が1/4を占め、学級担任では、半数が20代である。経験年数の少ない若い指導者もESD関連カレンダーを活用して各教科・領域の学習を進めることで、指導者の意識が継続したものとなり、児童の考えや発言内容にもそのつながりが見られるようになってきた。



また、ESDに視点をおいた教育活動を地域内外に発信することにより、環境教育を含めたESDを家庭・地域・行政に理解してもらうことができた。そのことにより地域の行事や行政主体の行事に参加でき、結果的に10年後、20年後の未来を拓く子どもたちを育成するスタートラインに立てたことが3年間の成果と言える。

今年度の課題として取り組んでいることは、新学習指導要領に対応したカリキュラムの作成をすることと、ESDでついた力を総合的に見取れる評価方法の研究を進める等である。今後もさらなるESDの推進に取り組みたい。

中学校賞

東京学芸大学附属国際中等教育学校

秋山 寿彦

はじめに

「持続可能発展教育（以下ESD）」というとき、多くの教師は、これまで取り組んできた環境教育とどこが異なるのだろうかという疑問にぶつかる。

ユネスコスクールにおけるESDの実践に関しても、ESDに対して社会的、経済的、文化的な取り組みが必要だとの指摘がなされている。このことは、ESDという概念が内包している核心部への既成の枠にとらわれない新たなアプローチが可能であることを示すともいえよう。

こうした視点に立つならば、ESDを教科及び道徳、特別活動、総合的な学習を結びつけるダイナミックな学びとしてとらえていくことができる。本校は、2011年1月にユネスコスクールに加盟するとともに、2010年2月に国際バカロレア機構のミドルイヤーズプログラム（以下MYP）の認定校となった。

MYPでは、特に、各教科及び領域、学校行事の連携を図った「ホリスティックな学び」が重視されている。本校では、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を、学校設定領域「国際教養」として新たに編成し、「ホリスティックな学び」の実現をめざす中心的な学習活動の時間として位置づけた。MYPの学習では、各教科の学習で生徒が獲得した知識、理解、技能を基盤として「社会貢献（コミュニティーサービス）」を学校の教育活動に取り入れていくことが重視されている。

「国際教養」は、生徒一人一人が自分の個性、特技、長所を生かし、「良き市民」として社会へ参画していくことを学習の到達点とし、学校外の専門家やさまざまな公共施設やNPOとの連携を図ったフィールドワーク学習を展開することを特色とする。また、現実社会への関心を高め、社会問題に対する自分なりの見方や考え方を紡ぎ出していく

手がかりとして「NIE（学校教育に新聞を取り入れる）」活動にも取り組んでいる。自らの考えを、新聞に投稿する発信活動を通して、社会とのつながりを意識する力の育成をめざした。

1 「豊かさ」とは何か

今日、私たちは世界でも数少ない「豊かさ」を手に入れることに成功した国となっている。

しかし、人・カネ・モノ・情報においてみられるようなグローバリゼーションが加速度的に進行する今日、多くの「若者」が「豊かさ」を実感しにくく、手の届かないものと感じ始めている。具体的な例としては、大学を卒業しても、約30%近くの「若者」が就職できない、また、就職したとしても本来の希望とは異なる非正規雇用の形態を受け入れなければならない現状を挙げることができる。ビジネスや高等教育の改革に関わる分野からは、グローバル社会で活躍することができる人材の育成が急務の課題と提唱されるが、海外の大学への進学では、日本は、中国、韓国、シンガポールに大きく引き離されている。さらに、自分の親の世代と同様の「豊かさ」を享受することが難しいという世代間格差を確実に意識し始めている。

明るい未来を切り開くと信頼を寄せてきたテクノロジーに関しても、3月11日に東日本を襲った震災、津波による東京電力福島第一発電所の事故により、原子力発電に対する「安全神話」は脆くも崩れてしまった。現在、「大きな危機」の渦中にいることを自覚しつつ、生徒一人一人がこれからの持続可能な社会の姿を、等身大に描き出せるようになることを願って、『「豊かさ」の追求』をESDのテーマとして、2009年4月から現在まで学校設定領域・国際教養において取り組んだささやかな実践を報告する。

2 「豊かさ」に対する中学生の意識に立脚した フィールドワーク～社会に対する多様な「窓」 としての新聞を活用して～

本校では、社会科地理的分野、歴史的分野と国際教養において新聞スクラップ活動を取り入れている。そこでは、社会科の学習とは、直接結びつきにくいスポーツ、料理、科学、健康、ボランティア、社会的な事件等も生徒一人一人の関心に基づいて、自由に取り入れスクラップブック作成に取り組んでいる。新聞記事のスクラップが集積されていく過程で、自分の視点で記事を分類し、見出し項目を作成する活動を通して、社会に対する関心を生徒自身が認識できるようになる。

そして、「私のおすすめの1枚」を毎月、紹介し合うミニ・トーク及び掲示する活動を実施する。新聞スクラップ活動（2010年10月から2011年2月）を通して、「豊かさ」を考えていくことにつながる記事として、以下の項目が出された。

- ・群馬県桐生市 小6いじめ自殺事件
- ・将棋コンピューター 女流王将撃破
- ・世界のクリスマス、日本のクリスマス
- ・全国各地に出現した伊達直人（タイガーマスク）
- ・大学生の就職率 「超氷河期」
- ・世界中が日本人の暮らしをしたら地球が2.3個必要
- ・90歳山口淑子 平和は当たり前ではない
- ・フェアトレードでチョコっと社会貢献
- ・元素に聞け 産地偽装の立件に一役
- ・視覚障害者 JR山手線目白駅で転落死

学校設定領域・国際教養の学習は、国際理解、人間理解、理数探究の3の柱によって構成されている。2010年12月に、「豊かさの追求」をテーマとして中学校第2学年で実施したフィールドワークは、上記のような新聞記事に関心を寄せる生徒の実態を踏まえると同時に、本校が位置する練馬区及びその近郊の地域との関わりを意識して、次の3コースを設定した。

- ・国際理解コース：上智大学神学部（練馬区上石神井）、佐久間勤先生と「宗教、キリスト教の視点から豊かさを考える」
- ・人間理解コース：ちひろ美術館（練馬区上井草）、「いわさきちひろの作品から考える豊かさ」
- ・理数探究コース：独立行政法人理化学研究所（埼玉県朝霞市）「脳科学研究からとらえる豊かさ」



上智大学神学部でのフィールドワーク

フィールドワーク後に、生徒一人一人が、A版の新聞を作成し、文集として発行し、学級活動として相互購読会をおこなった。（この新聞集は、毎日新聞社主催2011年第60回全国中学校新聞コンクール学習新聞の部で奨励賞を受賞した。）

そして、3月の学年集会において、フィールドワークプレゼンテーションを実施した。



群読発表形式によるいわさきちひろ紹介

3 「まちづくり」への参画を通して考える「豊かさ」

国際バカロレアのMYPでもとめられる「コミュ

ニティーサービス」に取り組んでいく基盤は、いうまでもなく学区を基本とする地域社会やそこに生きるさまざまな人々の姿である。

本校は、通学区域が設定されていない事情から、学校が位置する練馬区大泉学園地区と生徒が居住する地域を、いわば、楕円の2つの焦点として考え、「まちづくり」の学習を構想し、フィールドワークで生徒が学んでいく基本的な視点を獲得していくための「学びの場」ととらえている。

まち＝地域社会では、高齢者・外国人・子ども・勤労者・障害者等、さまざまな人々が生活している。「まちづくり」を学ぶ生徒には、「環境」、「多様性」、「共生」、「寛容」、「文化と伝統」、「創造性」という概念から、地域社会のよさと課題に迫ることができるようになることを期待した。すなわち、地域社会やそこに生きる人々の姿から、「豊かさ」を自分の目や皮膚感覚を通して、リアルにとらえることができるようになることを学習の重要な目標と考えた。

<事例1 「コミュニティサービス」の視点を導入した「まちづくり」学習（中学校第1学年対象）>

練馬区社会福祉協議会大泉学園ボランティアセンター 武石玲子氏の講演「ボランティア入門 ボランティアとは何か」

1995年の阪神淡路大震災後、ボランティア活動の教育的価値に対する認識が広まり、小学校においても多くの児童がボランティア活動を経験するようになってきている。同時に、本校生徒に対する「ボランティアに関するアンケート調査」からは、ボランティア活動というと駅や公園での清掃活動、空き缶の回収、物品のリサイクルが「定番」的活動として列挙され、しかも、学級・学校・学年全体で取り組む「他者に対する奉仕活動」と多くの生徒に認識されている。そこには、自分や仲間との企画の工夫や創造の可能性がほとんど意識されていないという特徴が見られる。

武石氏は、生徒一人一人の個性、好きなこと、興味のあることという「生き方」とのつながりから、ボランティアの意味と意義を、多面的多角的理解することの重要性を生徒に伝えてくださった。

本校生徒の約20%が、海外での教育体験を有する

いわゆる「帰国生」である。また、保護者が外国人である生徒も相当数、在籍する。こうした点から、外国人生徒に対する日本語教育の専門家である東京学芸大学国際教育センター准教授、菅原雅枝氏を講師とし、「外国人の視点からとらえたまち、学校」というワークショップを開催した。

ワークショップを通じて、「英語や日本語に限らず言葉が毎日の生活や学校での勉強を豊かなものにしていくうえで大切な役割を果たしている。」「外国人と日本人だけの問題ではなく、お互いの考え方やものの見方の違いに目をむけていくことが必要である。」との意見が出された。また、「帰国生」からは、英語をはじめとする現地の言葉を身につけるためには、毎日のように学校や家庭で、言葉が分からず涙を流す経験があったこととそうした自分を支えてくれた教師や友だちの存在を理解して欲しいという気持ちが表出された。

<事例2 美術科との連携を図った「丸の内フィールドワーク」と「まちづくり」発展学習として取り組んだ社会科（基礎歴史）「私の住むまちの歴史」>

本校美術科では、中学校第1学年で、千代田区竹橋にある東京国立近代美術館で、ボランティアスタッフの支援を頂き、美術館での鑑賞学習に取り組んでいる。2010年度から、「わがまち紹介」という自分が居住する地域についての調査学習の発展学習として、日本のビジネスの拠点となっている丸の内地区のまちづくりをアートという視点からとらえる教科連携型フィールドワークを実施している。

丸の内オフィス街は、歴史的建造物である三菱1号館の野外アートをはじめとして、とすると無機質な景観に陥りがちなまちを、訪れる人だれもがくつろぎやすい雰囲気醸し出すようなまちとするコンセプトでオブジェや表示の工夫を施している。このフィールドワークを手がかりとして、自分が居住するまちの特色や課題に向き合うことを学習の到達点とし、2011年度は、さらに、ESDの視点からパソナが取り組む農作物の室内水耕栽培のようす及びNPO法人が取り組む丸の内のまちづくりの現状を組み込み、フィールドワーク活動の深化を図った。

ESDの学びを実現していくためには、外部の専門家との連携や学校における教科間の連携とともにESDに関する学習そのものの持続発展性が不可欠である。

そこで、2011年度、中学校第2学年社会科（基礎歴史）において、「私の住むまち（ふるさと）の歴史」「私の住むまちに残されているもの（文化財、祭り等の行事や信仰）」という地域史調査単元を設定し、家族や地域の人々に対するインタビューや地域の歴史資料館訪問を中心としてレポートを作成する活動に取り組んだ。

中国から3年前に来日した生徒は、現代中国の激しい変化のなかで生きた祖父母の文化大革命期の生活と改革開放の成果を享受する現在を、金銭（経済的な豊かさ）と道徳心という視点からとらえた。

また、第1学年の「わがまち紹介」で、埼玉県朝霞市を取り上げた生徒は、第2次世界大戦の敗戦後、朝霞市に占領軍であるアメリカ軍の施設、キャンプ・ドレイクが設けられ、そこで働いた祖父の経験から遠い時代の戦争と平和の尊さを、家族や地域の切実なテーマととらえた。（板橋区教育委員会主催第10回櫻井徳太郎賞受賞作文集に収録）
<事例3 コミュニティーサービスを創造するフィールドワーク 横浜市寿町をめぐる>

2010年度の5月に実施した横浜フィールドワークでは、国際理解の視点から、貿易港として江戸時代末期の開港からの歴史を有する国際都市としての横浜、理数探究の視点からは、みなとみらい地区を中心とする先端科学技術都市として、横浜というまちの特色に迫るコースを設定した。

人間理解コースとしては、ESDの社会経済的視点を強く意識して、寿地区に生きる人々に対するボランティア活動に長年取り組んでおられるNPO法人・さなぎ達の櫻井武磨氏、日本基督教団の三森妃佐子氏、朝日新聞社横浜総局のお力を借り、不安定な生活のなか横浜で生きるホームレスと呼ばれる人々と私たちとのつながりを考える学習に取り組んだ。

中学2年生にとっては、多くの観光客が訪れる横浜の「表の顔」ともいえる中華街や元町商店街、横浜スタジアムとJR根岸線の線路一本隔てたと

ころにある寿地区の簡易宿泊施設で、多くのホームレスの人々が暮らしているという事実は、大きな衝撃であった。同時に、1982年、自分たちと同年齢の中学生がホームレスを襲撃するという事件がはじめて発生したのもこの横浜であったという櫻井氏の説明を聞き、言葉を失った。櫻井氏や三森氏がボランティアとして真冬の夜回りや炊き出しを中心とする活動に取り組んでおられることを知った生徒たちのボランティア観には少なからぬ変容が生まれた。

フィールドワークから約2ヶ月が経過した夏休みの直前に、寿地区の炊き出しと福祉作業施設訪問に取り組むというコミュニティーサービスの企画が生徒から出された。活動に参加した生徒は、そこで本校の母体校である東京学芸大学附属大泉中学校を卒業し、大学生となっている先輩が炊き出しスタッフとして活動している姿を目にして、これまでにない新鮮な驚きの表情を浮かべた。

活動に参加した生徒は、読売新聞のU-25欄で「最初は、少し怖かったが、雑炊を配っていると「ありがとう」と言われたりしてうれしくなった。これまでの私は、ホームレスの人に偏見を持っていたが、偏見をなくしたい」と記した。



寿地区を歩く櫻井氏と生徒たち

<事例4 健康や福祉領域からの「豊かさの追求」>
2010年度から東京学芸大学や味の素グループが立ち上げることに加わった「難病や障がいもある人もない人も共に地域で支え合い、社会の一員として尊重しあい、生き活きと楽しむ一日とする」ことを趣旨とする「Walk&Run Festa」に保健体育科からの呼びかけで100名を超える生徒がボランティアスタッフとして参加し、障がいのある人々

といっしょに活動する体験を積み重ねている。



Walk & Run Festaでの活動

また、体育行事であるマラソン大会の会場として使用させていただいている練馬区に対する地域貢献を目的とし、光が丘公園で開催されるロードレース大会の運営ボランティアスタッフ活動に取り組んでいる。朝日新聞「声」欄に『ボランティアは「貢献してあげる」という一方的なものではなく、快適な時間を過ごすため「貢献し合う」ことなのだ』という意見を生徒は発信している。

「豊かさの追求」をねらいとする中学校の活動においては、生徒自身が学校の環境や特色を多面的多角的にとらえ学校内だけで完結してしまう「内向き」の活動に陥らないように教師は適切な助言、支援のあり方をもう一度見直してみる必要がある。

毎年、10月下旬からいちょうの実である銀杏の処理に苦勞されている用務員さんの姿を紹介し、学校の「厄介者」扱いされていた銀杏を活用して、チャリティーボランティア及び高齢者福祉施設への食材提供をする「チーム・銀杏」の活動を組織した。これまでの寄付や物品の提供をもとめる他者依存型の活動から、身近にある資源を有効かつ持続的に利用していく自立型の活動は、ESDが教育における「スモールビジネス（生徒が企画、運営し、金銭の使途まで視野に入れた小企業の活動）」へと発展する可能性をも有するとの認識を持っている。

まとめと今後の課題

これまで述べてきた事例を基盤として、2011年2月に開催した本校第2回公開研究会で、『「豊かさ」という概念を検証していこう!』という主題で国際教養の授業を試みた。数学科による理数探

究学習で生徒が作成した学校に望むこと、二酸化炭素の排出、若者の就職率、自殺者の推移等の「豊かさ」ととらえていく手がかりとなる生徒の「統計グラフ」作品を活用することから、今の自分たちが「豊かさ」の実現に向けてできることを考え、話し合った。学習後の朝日新聞「声」の欄への投稿で『「豊かさ」とは何だろうか。最近まで、豊かさとは科学技術によって創造される「モノ」で目に見えるモノだけだと考えていた。しかし、今は違う。……人から人へと伝わる豊かさ。私たちは、目には見えない心の豊かさを創造することができるのだ。』と生徒はまとめている。

多くの人々が自己を肯定的にとらえにくい状況におかれ、閉塞感を感じ、目標や希望を見つけにくくなっている現在だからこそ、ESDへの取り組みとその充実がもとめられる。

本校でも、理想的なESDのあり方を話し合い、カリキュラムマップの作成に取り組んだが、ESDに対する教師の考えを整理することには役立ったが教育活動の充実を生み出すまでには至らなかった。このことは、当然、ESDに関する学校としての指導計画が十分に整理されていないことを意味する。

しかし、ESDを広め、深めていくためには日常的に、教師が互いに連携し、ホリスティックな学びの場としての学校を創造していくことがもとめられる。

高等学校賞

秋田市立秋田商業高等学校
大堤 直人

1. 「ビジネス実践」とESD

秋田市立秋田商業高等学校は、平成22年度に創立90周年を迎えた。各学年に商業科クラスが6つあり、全校生徒は現在約700名である。ユネスコスクールには2009年に加盟した。

本校では総合的な学習の時間を活用して実施するすべての学習活動を「ビジネス実践」と称している。ビジネス実践とは、学校全体を模擬会社として捉え、全校の生徒・職員が各班に分かれて、商品の企画や開発、市場調査、仕入れ、販売、会計処理など、ビジネスに関連した活動を実際に体験する商業系総合体験学習のことである。こうした体験により、生徒たちが社会人としての基礎力を身に付けることが期待されている。ビジネス実践の発表の場はAKISHOPと呼ばれている。

本校において商業教育やキャリア教育の一環として取り組まれているこの「ビジネス実践」全体がESDであると言える。

ビジネス実践の校内組織の中には、環境に優しい製品を作る班もあった。2008年度にはエコバッグや古新聞を素材としたフラワーポット、2009年度には廃油を利用した廃油キャンドル、2010年度には古着から手作りでヘアアクセサリやアームカバーなど、さらに、紙パックを再利用したハガキが製作・販売された。こうした試みを通して、製品開発に携わった生徒たちは資源のリサイクルに対する意識を確実に高めたようである。また、AKISHOP本部である生徒会執行部は数年にわたって、ペットボトルのキャップを集めて途上国にワクチンを送る「秋商エコキャップ運動」を実践している。これらは環境教育にかかわるESDと捉えることができる。

本校はビジネス実践の一環として「キッズビジネスタウン」という試みも行っている。これは疑似通貨や疑似会社を設定して、高校生が小学生に

対して社会の仕組みを教えるものである。こうした金融教育もESDと重複する部分が多く、経済や金融にかかわるESDと考えられる。



2011年に作成したモザイクアートの前で

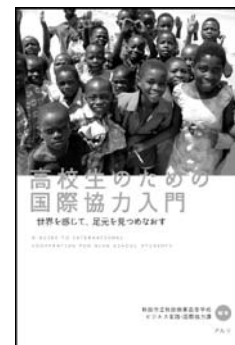
このビジネス実践の校内組織の中にユネスコスクール班（前身は国際協力課）がある。高校2～3年生約40名と教員2名からなるこの班が、校内におけるESDやユネスコスクールとしての活動を主導している。JICA東北（独立行政法人国際協力機構東北支部）や秋田県内のNGOであるRASICAなどの外部機関との連携により、以下のような活動が可能になった。

2. 国際理解教育の取り組み

ユネスコスクール班は数年前から、国際理解・国際協力に関連した活動を継続的に行ってきた。年度毎に次のような研究・実践のテーマを設けたが、それはユネスコスクールの四つの基本分野のいずれかに関連している。また、そのような研究・実践をまとめた書籍も発行している。

2007～2008年度のテーマ 「世界を感じて、足元を見つめなおす」

このテーマに関連して書籍『高校生のための国際協力入門』を出版した。この本の折り返しには次のようなキャッチフレーズがある。



「貧困や飢餓、温暖化といった地球規模の課題を解決するために何ができるのか? 秋田県の高校生がJICA東北と連携して行った国際協力活動を紹介し、さらに第一線で活躍する先輩たちの貴重な提言を収める」(2008年、アルテ刊)

2009年度のテーマ 「地球規模の問題に対する国連システムの理解」

このテーマに関連して書籍『高校生のための国際連合入門』を出版した。この本は以下のような内容である。



「地球上のすべての人が食糧・住居・医療・教育を享受する公正で持続可能な世界を築くために、国連の果たすべき役割とは何か? 外交の第一線で活躍する外務省職員による寄稿を紹介し、さらに高校生によるESD(持続発展教育)の実践例を収める」(2009年、アルテ刊)

2010年度のテーマ 「アフリカ理解」

このテーマに関連して書籍『高校生のためのアフリカ理解入門』を出版した。この本には、以下の説明にある通り、本校で実施したアフリカ・スタディツアーの報告が含まれている。

「アフリカに渡った秋田の高校生たちは何を見、何を感じたのか? 『アフリカの真珠』と呼ばれた緑豊かな国ウガンダへの高等学校主催のスタディツアーについて報告するとともに、青年海外協力隊としてアフリカで働いた先輩たちの講話と、アフリカ支援に関わってきたJICA関係者の寄稿を紹介する」(2010年、アルテ刊)

3. 環境教育の取り組み

2010年度までの活動は主として世界の貧困や飢餓、HIV/エイズの問題、難民問題など、どちらかと言うと現世代の人々の問題に関連していた。2010年度からは、未来世代に関係した環境教育の取り組みを始めている。ブリティッシュ・カウンシルが主催する「気候チャンピオン」プログラムに参加したほか、秋田県内で国際協力や環境問題にかかわる活動を行っているNGOであるRASICA(ラシカ)との連携を開始した。

①RASICAとの連携

RASICA (<http://rasicafe.org/>) は2008年に、「どんなことでも良いから行動を起こす」というルーツ&シューツの考え方を基本とし、環境に関心を持ち社会にプラスになる変化を起こすことを目的として、秋田県在住の菊地格夫氏によって設立されたNGOである。秋田商業高校ユネスコスクール班は、このNGOとの連携を2011年度から本格的に始めた。RASICAのメンバーによる環境問題に関する講座を複数回受講したほか、小学生や中学生を対象とした環境講座と一緒に実施したり、東日本大震災の被災地へのボランティア活動と一緒に参加したりしてきた。ユネスコスクール班の生徒は長期休業中に、RASICAが運営するカフェでの手伝いも行った。



RASICA代表の菊地格夫氏による環境講座

このようにして、この団体の持つネットワークを活用することにより、本校生徒が大学生から大人までの幅広い人材と交流することが可能になっている。また、このNGOが運営する施設(ラシカ

フェ)や被災地でのボランティア活動などを「経験値」としてポイント化し、このNGOが年に数回実施しているスタディツアーの参加費用をそのポイントで支払うことができるシステムを構築している。このようにして、2012年1月上旬には、ユネスコスクール班の生徒3名が、RASICA主催のネパール・スタディツアーに参加する予定である。RASICAはこのスタディツアーで、首都カトマンズにあるバルマンディル孤児院の生活環境改善のため、ソーラーパネルで充電するランタンを届け、持続可能なシステム構築による子供の生活環境改善を行う予定であり、参加生徒はそのような環境に関わる実際の途上国支援活動を見聞することができる。

下の図は、秋田商業高校ユネスコスクール班とNGO RASICAとの連携を表している。



②気候チャンピオンとしての取り組み

本校ユネスコスクール班の三つのグループは2010年から2011年にかけて、ブリティッシュ・カウンシル主催「気候チャンピオン」プログラムに参加した。

2010年度の3年生の一つのグループは、「ひまわりプロジェクト」に取り組んだ。これは、学校の

敷地などにヒマワリを植えて緑を増やすとともに、種を採取して油をしぼり、とれた油でキャンドルや石けんを作るという計画であった。種苗業者からロシアヒマワリの種を仕入れ、学校の花壇を整備して種を植えるとともに、全校生徒や教職員に対しても家庭の敷地で植えてほしいと呼びかけた。ヒマワリの種はある程度集めたものの、結果的に搾油するところまではいかなかった。



3年生のもう一つのグループは、「Think Globally, Act in Akita (地球規模で考え秋田で行動を)」というプロジェクトに取り組んだ。地元の秋田において小中学校を訪問し、環境に対する児童生徒の意識を高めるような出前授業を実施することを計画した。主に中学生を対象として、「国際理解から環境を見つめるワークショップ」などの出前授業を計4回実施した。

2年生のグループは、気候チャンピオンの取り組みとして二つのプロジェクトを行った。一つは「チョーク再生プロジェクト」、もう一つは「グリーンカーテンプロジェクト」である。こうした取り組みの総称を「結 (ゆい)」としたが、これは人間と環境との結びつき、そして人間同士の結びつきを表している。

チョーク再生プロジェクトは、使い古しの短いチョークを各クラスから集め、粉末にし乾燥させ



りサイクルチョークを作るというものである。チョークをどこまで再利用できるか、また、チョークがどのくらい無駄になっているかを解き明かすことを目標とした。グリーンカーテンプロジェクトは、チョークの粉末を肥料にして教室脇でつる植物を育て、緑のカーテンを作るというものである。教室内の温度の変化を計測し、温暖化防止や学習環境の向上にどの程度効果があるかを調べようとした。教室脇には、秋田市環境部から秋田県地球温暖化防止活動推進センターを通して譲り受けたアサガオの苗、購入したヘチマやリュウキュウアサガオの苗などを植えた。しかし、葉は期待通りには繁らず、陽の当たり方や植えた時期などに課題があった。

③小学生や中学生への環境講座

2011年度には「地球環境問題」をテーマとして設定し、地球温暖化や森林破壊、大気や土壌の汚染問題、水危機、エネルギー問題などについての理解を深めた。ユネスコスクール班の生徒たちは、自分たちが環境問題について学んだことを小学生や中学生に伝える活動を積極的に行っている。

2011年度に実施した講座は次の通りである。7月には、県内のユネスコスクールの一つである大仙市立大曲南中学校の3年生30数名を対象とした地球環境問題に関するワークショップを本校を会場にして行った。10月には、小学生を対象とした環境講座「遊んで学べる地球環境問題～伝えよう未来へのメッセージ～」を、秋田県中央地区老人福祉総合エリアを会場に行った。児童の保護者を合わせて約40名が参加した。また、11月には、秋田ユネスコ協会主催の外国人による日本語スピーチコ

ンテストの終了後に、来場者を対象として「自分環境と世界の関係」と題する環境ワークショップを行った。



ユネスコスクール班生徒による小学生対象の環境講座

④環境問題に関する書籍の出版

ユネスコスクール班は2012年2月下旬に、『高校生のための地球環境問題入門——子どもたちの未来のために』という書籍の発行を予定している。

この本は、地球環境問題の概要を紹介し、その解決に向けて読者一人ひとりに認識と行動を促し、それによって地球環境問題の解決に実際に寄与することを目的としている。地球環境問題の現状と原因について読者に考察していただくとともに、その解決に向けた本校ユネスコスクール班の取り組みや国連などによる世界的な取り組み、ユネスコスクール班の生徒・教員、寄稿者のアイデアを紹介し、読者を持続可能な地球環境の再創造に向けて鼓舞するような本にしたいと考えている。

この本の構成は次の通りである。

- 第1章 できることを実践する
- 第2章 授業で理解を深める
- 第3章 地球環境問題の概要
- 第4章 国際社会による取り組み
- 第5章 「地球憲章」全文
- 第6章 地球環境問題の解決に向けて
- 第7章 エネルギー問題の解決に向けて
- 第8章 県内関係者による感想と提言
- 第9章 生徒・教員による感想と提言

これまで発行した本と同様に、この本はジュンク堂や紀伊国屋などの大手書店やネット書店で販売される予定である。ご高覧いただければ幸いです。

4. 被災地でのボランティア活動

東日本大震災により甚大な被害を受けた宮城県石巻市に、4月から10月まで計15回、延べ44人のユネスコスクール班生徒がボランティア活動のために赴いた。避難所となっている石巻市立湊小学校において物資の仕分けや配給補助、被災者への無料コーヒーの提供、スポーツや学習を通した児童との触れ合い、体育館横の側溝の泥出し、敷地の除草作業などを行った。避難所の閉鎖の際にも、荷物の運搬などの作業を手伝った。秋田からは片道4時間以上の行程であるが、行きたいという生徒の熱意に押され、RASICAの協力により実現したものである。



スポーツを通した児童との触れ合い



避難所横の側溝の泥出し

避難所の裏手には寺院があり、生徒たちはその寺院の墓石に自動車は何台も乗っている異様な光景を目の当たりにした。墓地の清掃活動を行った

女子生徒の一人は活動後、「墓地を清掃するという今日の活動に、日本人的な優しさを感じた」と話していた。

5. まとめ

本校ユネスコスクール班は以上のように、年度ごとにテーマを少しずつ変え、異文化理解、地球規模の問題に対する国連システムの理解、地球環境問題などの各分野を網羅的に扱ってきた。そして、それぞれのテーマについての研究や実践をまとめ、本を編集・発行してきた。

このようなすべての取り組みは、秋田商業高校が総合的な学習の時間に実施している商業教育の枠組みの中から生まれたものであるが、本の出版と流通により、授業の枠を越えて一般社会との接点を持ち、地球規模課題の解決に向けた提言を行うことが可能となっている。

本校ユネスコスクール班は今後もESDの趣旨に則って、平和で公正な、そして持続可能な世界を構築するために、その担い手を育てるとともに、できることを実践することを目標にして活動する予定である。私たちの活動が、ユネスコ憲章に謳われている真の平和の確立に少しでも寄与することができれば幸いであると考えている。

審査委員特別賞

千葉県市川市立稲越小学校

本多 成人

どの学校でもできるESDの普及を目指して 一学校に様々な「仕掛け」をー

1. 市川市立稲越小学校とは……

本校は市川市の北部、松戸市と隣接するところにある創立31年を迎える学校である。都心から近く、学区には4つの学校がある。しかし、梨畑が広がり市街化調整区域にかかっているため、新しい住宅が建ちにくい環境である。加えて3年前から、支援学校小学部が校舎1階に併設された。

学校創立当時は500名を超える児童が在籍していたが、年々児童数が減少し、12年前より全学年単学級となった。(現在の全校児童数162名)

学級編成がないためよい意味での競争心が生まれにくく、学校生活が単調になりがちで、人間関係に広がりが見られない状態が続いていた。また異年齢の子供たちとの関係作りも難しい状況があった。

そのような状態を変え、学校生活に潤いを持たせたいという願いのもと、全学年を18のグループに分けた異年齢集団による縦割り活動を8年前に始めた。グループのリーダーとして6年生を指名し、責任感とリーダーシップを身につけさせることをねらいとした。日常の清掃活動から始めたこの活動は次第に広がりを持つようになり、本校の学校生活の根幹をなす活動となっている。

2. なぜユネスコスクールに……

本校は、昨年ユネスコスクールに登録した。登録に際し、本校を取り巻く環境からは、取り立ててこれといったものは見当たらなかった。そこで、本校が長年取り組んできた人間関係作り(縦割り活動)を中心に、自立心、判断力、責任感などの人間性をはぐくむ活動と、他人や社会、自然とのかかわりやつながりを尊重できる個人を育む

観点から見直してみた。ESDが求めている持続可能な社会を構築するのは『人』であると考えたからである。

ESDを普及させるためには、外的環境にかかわらず、どんな学校においても実現可能な取り組みが求められる。以下は、その一端になればと考え実践を行った記録である。

3. 学校に様々な仕掛けを作る

(1) 仕掛けの根幹 ー異年齢縦割り活動

(通称『ぼかぼかグループ活動』)

縦割り活動は、いわば人作りの活動である。本校では、1年生から6年生までを縦割りで18の異年齢集団グループに分けている。学級編成がない本校にとって、縦割りグループの発表は子供たちの心ときめくものがある。

さらに、1年間同じグループではなく、前期と後期でメンバーを入れ替える。これも仕掛けの一つで、今度は誰と一緒にグループになるのかという期待と新鮮さが子供たちの活動を一押ししている。



ぼかぼかグループの発表へクラスがえのワクワク感が…

常時活動として、毎日の清掃、週1回のぼかぼかタイムがある。また、チームとしての結束力やリーダーシップを養うため、前期に全校歩き遠足

活 動 名	扱 い	時 数
前期ぼかぼかグループ編成・発表	***	***
入学式	学校行事	1 時間
笑顔でにっこりまたあした (6年生による1年生の送り活動)	総合	1 時間 / 日 3 日間
ぼかぼか全校歩き遠足	学校行事	5 時間
1 年生をむかえる会	学校行事	
ふれあい清掃①	学校行事	1 時間
なかよし給食①	給食指導	***
ぼかぼか大運動会 (紅白分け・ぼかぼか競技・ぼかぼか演技)	学校行事	6 時間
打ち水大作戦 (支援学校と共催)	***	***
ぼかぼか水泳大会	体育	2 時間
後期ぼかぼかグループ編成・発表	***	***
なかよし (青空) 給食②	給食指導	***
ぼかぼか全校バス遠足	学校行事	6 時間
ふれあい清掃②	学校行事	1 時間
ひばりまつり	学校行事	2 時間
地域安全確認大作戦 (コミサガ共催)	学校行事	2 時間
おわかれ集会	学校行事	2 時間
おわかれバイキング給食	給食指導	***
卒業証書授与式 (全校出席)	学校行事	2 時間
清掃活動 (日常の清掃時間)	清掃指導	通年
読み聞かせ (6 年→1 年)	読書指導	通年
給食配膳お世話活動 (6 年→1 年)	給食指導	前期
兄弟学年で新体力テスト	体育	1 時間
兄弟学年でサツマイモ栽培・収穫祭	教科	栽培 1 収穫祭 1
ともだちいっぱい名人テスト	***	通年

【稲越小学校 「ぼかぼかグループ活動」】

と創作ダンス発表会（運動会の種目の1つ）、後期に全校バス遠足と創作劇発表会「ひばりまつり」を置いている。その他、年2回行うぼかぼか清掃（地域・保護者・特別支援学校小学部）となかよし給食、その後行う小学部との合同ダンス。ぼかぼか水泳大会、支援学校小学部との打ち水大作戦、地域安全確認大作戦、お別れ集会、お別れ給食。そして入学式と卒業式。学校生活で重要な部分は縦割り活動で行っている。

この活動は、6年生の「リーダーシップ」を養うとともに、5年生以下はグループのメンバーの一員としての「メンバーシップ」を養う活動でもある。グループへの「所属感」、個人としての「存在感」、活動を成就したときの「達成感」の3つの『感』を目指している。その成果の最も現れる活動

が、創作劇発表会「ひばりまつり」である。

(2) 創作劇発表会「ひばりまつり」

本校は創立以来読書を研究の柱とし、「ひばりまつり」を読書発表会として行ってきた。しかし、全学年単学級となり発表会の運営が難しくなった。そこで異年齢集団による縦割り活動を始めてから、ひばりまつりを創作劇発表会に転換した。

ひばりまつりでは、縦割りの18グループを6つのチームに編成し、それぞれのチームが15分以内で本の内容が観客に伝わるように演劇発表する。



選んだ本を6年生がチームのみんなに読み聞かせ

演劇発表は、「選書→脚本作成→読み合わせ→練習→発表」という手順で行う。6年生は何回も本を読み込み、6冊を選択する。15分という制限時間の中に納めるため、劇化する場面を選びPCで脚本を作成し、担当職員の指導を受けながら脚本が完成する。

チームごとに読み合わせ、配役を決め、練習に入る。全体で11時間という短い練習時間で行うため、リーダーシップとチームの協力が必要になる。6つの劇の幕間には図書委員会の児童が劇に関連したクイズを出し、ひばりまつり全体を引き締める役割を果たしている。

今年は道具作りに時間をかけすぎず、自分たちの演技や声で表現できるように熱心に練習を重ねた。終了後子供たちはチームごとに振り返り活動を行い、お世話になった6年生へのお礼の手紙を書き終了となる。

保護者や地域の人たちもとても楽しみにしている催しで、体育館は毎年満席状態である。保護者のアンケートからもこの活動に高い評価が寄せら



チームごとに「立ちげいこ」 体育館のステージで



ひばりまつり 子どもたちの熱演



まつりが終わって……リーダーの6年生にありがとう

れていることがわかる。

ひばりまつりでの子供たちの姿に色濃くあらわれているように、異学年縦割りグループ活動は本校の学校生活の根幹をなすものであり、子供たちの創造性、自主性、責任感を養う上で非常に効果的な活動である。

4. 仕掛けは給食にも ～給食で食育に挑む

どの学校においてもできることが給食における残菜量を減らす活動である。

1996年の農林水産省の統計によると、日本は年

間5700万tの食糧を輸入しながら、1900万tを廃棄している結果がある。（残菜率33％）

この実態を踏まえ、本校では毎日栄養士が行っている給食の残菜率調査に注目した。その結果を見ると、特に野菜の残菜（10.7％）が多いことがわかった。そこで少しでも残菜を減らし、バランスのとれた食生活で健康でいられる体を作ってもらいたいという願いから、残菜率を減らす活動を始めた。

3年前は年平均10％を越える残菜（多い月で17％強）があった。そこで年平均残菜量を10％以下にするという数値目標を立て、学校全体で取り組んだ。



なかよし給食 ぼかぼかグループと一緒に



お別れバイキング給食 全校が一堂に会して

子供たちに食の大切さを知らせ、残さず食べる「ばくばく週間」や「お誕生日給食」、「ラッキー給食」、「リクエスト給食」、「魚の食べ方コンテスト」「なかよし給食」「お別れバイキング給食」等をもうけ、食に対する興味関心を高めた。

また、栄養士と学校図書館司書が合同で本の中に登場する食べ物を開発し、給食のメニューに入れる試みも行った。今年は『ふたりはいっしょ』

より「がまくんのチョコクッキー」、『魔女の宅急便』より「キキのとどけた“おさかなパイ”」をつくり、図書館行事である「本となかよし月間」の期間に「本となかよし給食」として提供した。



がまくんの
チョコクッキー



おさかなパイ

読書の幅を広げるための「本となかよしビンゴカード」の中に「本となかよし給食を食べた」という項目を設けたことにより、子供たちの興味関心は読書とともに「食」にも広がった。



ビンゴカードを手に
図書室へ



カウンターで
本を借りる
「これでビンゴだ！」

こうした多くの試み（仕掛け）の結果、2年前は8.4%、昨年は5.6%、今年は現在までで4.2%と残菜率は着実に減少している。野菜の残菜が多いことから始めた取り組みであるが、給食全体に好影響を及ぼし、全体の残菜量も減少している。

また子供や教職員だけでなく、給食調理員の協力も必要なため、毎月のデータをグラフ化したものを給食室にも配っている。成果が上がっているだけに給食調理員のやる気も高まっている。

今年は新たに「残菜0の日」を決め、給食の残菜を0にする取り組みを始めた。5月から始めたが、

0にすることは難しい。しかし、職員も子供たちも意識をすることが大切で、0達成ができれば達成感を味わうことができる。今回の受賞理由は給食への取り組みであった。このことを子供たちだけでなく保護者にも知らせることで、家庭における残菜も減ってくれることを願っている。

5. 地域とともに食育を 米作り学習

この地域は梨畑と市街化調整区域が大部分を占めているため、水田は皆無である。そのため社会科5年で扱う「米の生産」の理解が十分にできない状態であった。そこで10年ほど前、学校内に1枚の小さな水田を作った。それ以来、毎年5年生は、「田おこし、代掻き、田植え、草取り、水の管理、稲刈り、もみすり」といった一連の作業を、地域の方に教えてもらいながら行っている。



田植え・稲刈りの風景
～地域の方に教えて
いただいて



資料室にある農機具
から「唐箕」

資料室には、近所の農家から集めた田げたや除草機、足踏み脱穀機や唐箕、千歯こき、電動脱穀機、ひき臼など、昔から米作りに使われてきた農具が使える状態で保管してある。授業ではこのうち足踏み脱穀機と唐箕を使って脱穀作業を行っている。雑草取り、水やり、スズメ対策、精米など、子供たちの目の届かないところは、地域の人たちが面倒を見てくださっている。昨年は餅米を作り、地

域の人たちや保護者と共に餅つきを行った。米作り学習は、子供たちにとって得難い体験・探究学習の場であり、地域の協力者の方たちも子供たちと共に米作りができる楽しみを味わっている。

6. さらに地域と連携した「仕掛け」を

(1) 地域ふれあい写真展

本校では4年前より、子供たちや保護者・地域・教職員が参加する「地域ふれあい写真展」を開催している。市川市写真家協会の方から写真の撮り方を教わり、3年生以上の子供が学校内で気に入ったアングルの写真を撮る。撮った写真の中から1枚を選び提出する。自治会報にもこの催しが紹介され、地域の方も参加して下さる。参加者の写真は掲示板に張り出され、児童・保護者・地域の方・教職員による投票が行われ、賞が決まる。



地域ふれあい写真展「この写真いいなあ」

子供の作品は写真家協会主催の「市川フォトフェスティバル」に出品し活動を広げている。普段見慣れている風景でも、改めて意識をしてみると、新鮮さや気がつかなかったところが見えてくることがある。この活動を通して自分たちの地域を知り、良さを発見し、自分の住む地域を好きになってほしいと願っている。

(2) ふれあい清掃

ふれあい清掃の参加者は、児童・保護者・地域協力者・支援学校児童・保護者・施設開放団体協力者・教職員である。年2回実施している。

目的は、進んで自分たちの生活している環境を整える態度を育てることである。ほかほかグループで協力し、保護者や地域の方と共に作業する。支援学校の併設以降は、支援学校児童・保護者も加わり、18の清掃場所を協力して清掃している。

(3) 天体観望会

本校の校庭の周りに人家は少なく、夜になると輝く星空を十分楽しめる環境にある。前PTA会長が天文学博士で、現在三鷹天文台の職員であり、近隣に天文愛好家が住んでいるという人的環境もあり、年3回夜空の観測を行っている。



天体観望会・夏 「小さいお友達」も参加

自動追跡の望遠鏡や、大型望遠鏡、P C等を持ち込み、月のクレーターをはじめ、火星や木星、金星等を観察している。子供たち、保護者、地域の方たちにとっては楽しい行事であり、宇宙に対する興味関心を高めている。

7. おわりに ～「つながり」のある仕掛けを

「ESDを普及させるため、どんな学校においても実現可能な取り組み」という観点から、本校における実践を「仕掛け」という表現で示してきた。「仕掛け」と言うからには、そこには「ねらい」がある。本校において、それは「つながり」という言葉に集約される。どの活動も「つながり」をもって行っており、「つながり」の根幹となっているのが「異年齢縦割り活動」なのである。

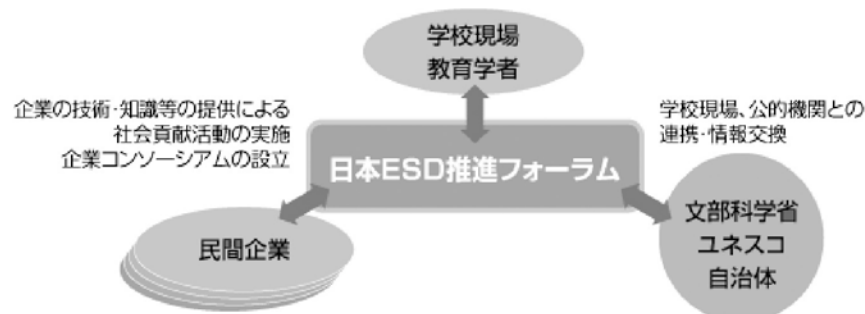
ESDを実現していくために、これまでの実践を改めて検証し、とらえ直し、すべての教育活動を通じて持続可能な社会づくりのための担い手をつくっていききたい。



NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムについて

NPO 法人日本持続発展教育 (ESD) 推進フォーラムは、発想豊かで、柔軟性に富んだ早い時期から、持続発展教育を取り入れることが大切だと考え、持続可能な社会を担う人として、具体的なビジョンを持った子どもの育成を目指し、2009 年 5 月に発足いたしました。

「社会の担い手を育てるため、ESD を教育現場へ推進する」という共通の目標のもとに、産・官・学が共同するための橋渡し役となって活動しています。



主な活動

■教育関係者へ向けた活動

学校教育の現場で ESD を普及していくため、主に教員を対象にした研修会等を全国各地で開催します。

■ユネスコスクールの普及

ユネスコスクールの目指す研究テーマと ESD のテーマが一致していることから、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点として位置づけ、加盟校の増加に取り組んでいます。当 NPO でもその活動をサポートしています。

■社会全体で子どもを育てる仕組みづくり

企業や自治体・団体等の力で『持続可能な社会づくりと担い手』をどのように育成していくか考え、実行していきます。

■ユネスコスクール全国大会 持続発展教育 (ESD) 研究大会 の実施

ユネスコスクール、教育関係者、自治体・団体、企業関係者が ESD の実践研究について相互交流を図るとともに、日本における ESD の普及・発展を考える研修会を開催しています。

■持続発展教育 (ESD) 大賞

ESD を実践している、全国の小中高等学校の中から優れた活動に対し、持続発展教育 (ESD) 大賞を贈ります。

■ホームページを通じた情報提供

ESD の実践紹介など、最新の学校現場の状況をお伝えしていきます。企業や団体・自治体などが制作した ESD の趣旨に合う教材を集めたネットライブラリを開設しています。

(NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム ホームページ: <http://www.jp-esd.org>)

ぜひ

NPO法人 日本持続発展教育推進フォーラム

ホームページをご覧ください!!

NPO法人 日本持続発展教育(ESD)推進フォーラムでは、ホームページを使って、情報発信を行っています。

Facebookでも近況報告を行っています!



<http://www.facebook.com/jp.esd>

NPO法人 日本持続発展教育(ESD)推進フォーラム

〒110-0005 東京都台東区上野3-17-7 (株)教育新聞社内
TEL:03-3832-3581 FAX:03-3832-3570 E-mail:info@jp-esd.org

<http://www.jp-esd.org/>

ESD推進フォーラム

検索

第2回持続発展教育(ESD)大賞
受賞校実践集

発行日：平成24年3月1日

発行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒110-0005 東京都台東区上野3-17-7

Tel：03-3832-3581

Fax：03-3832-3570

E-mail：info@jp-esd.org